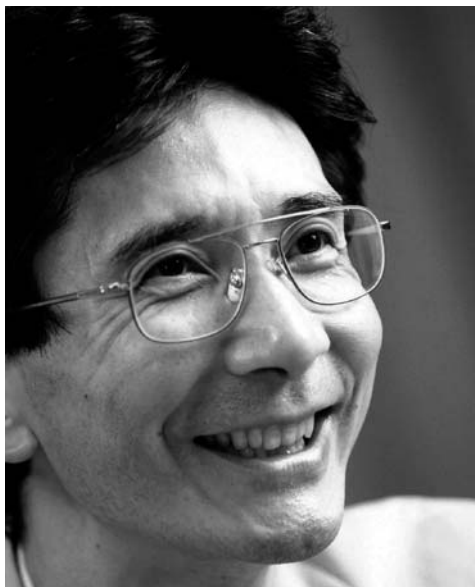


INTERVIEW

西垣通教授インタビュー

企業の研究所のエンジニアから大学教授に、そして昨年秋には2作目の小説「1492年のマリア」も出版された。西垣教授が向かっているのは、ということなんだろうか？「あんまり言いたくないなあ」を連発、時折、恥ずかしそうに笑いながらも、真直ぐ話してくれました。



企業のエンジニアから大学教授へ
転身した心の中

心の内面の微妙なことは、あまり言わないことにしているんですが、エンジニアでは満たされないものがあつたということでしょうか。企業の研究所で、情報工学のなかの狭い分野の研究をしていたんですけど、それをずっと続けても、コンピュータの根本を変えるようなことはとてもでき

ない。そこそこの成果を出して、あとは管理職になって、コツコツ階段を上がっていく。そんな未来の自分の生き方が見える。それだけって、何かつまらないじゃないですか。新たな分野で、納得のいくクリエイティブな活動をやりたい。自分を賭けるものが欲しかったんですね。なんていうのかな、信念にしたがつて一筋に生きていくことに憧れの気持ちがあるんですね。よくロマンチストだって言われますよ。

メーカーから大学に移って、30代後半から40代の頃はね、結構大変でした。だって、それまでコンピュータの研究者として走ってきたわけですからね。いくら若い頃から文系に興味があつたなんて言っても、急に社会学とか哲学の本とか読んで、そう簡単にわかる話でもないし。まあ、周囲の専門家に教えてもらったり、がむしゃらに自分でいろいろ考えたりして、いつの間にかここまで歩いてきちゃった。

大学人とは

大学の先生は、一つの専門をきちんと持っているだけじゃなくて、ある意味では旺盛なアマチュアでなきゃいけないと思う。自分で言うのは恥ずかしいけれど、既成の権威に安住するんじゃないくて、現代の複雑で巨大な問題に対して、誠心誠意考えていくことが知識人の仕事ではないだろうか。もちろん、若いときは一つの専門分野を深く修めなくちゃ駄目ですよ。一つの分野でがんばってプロになることは大学人の必要条件。でもそれだけじゃ寂しい。大事なことは次々に越境していくこと。越境していけば、知らないことばかりだから、間違いかもしれない。恥をかかかももしれない。常に不安ですよ。でも、そういう緊張感のなかで、世界の複雑さ、多面性、奥深さが分かってくる。

もちろん、僕は深く狭いスペシャリストを決して否定しな

いし、尊敬してます。でもそれと同時に、ジェネラリストも大事なんです。例えば、環境問題なんて、それこそ政治から経済、科学、技術、文化と、さまざまな分野にまたがっているわけですよ。そういう複雑で多面的な問題にたいする論評を、今、誰がやっているかって言うと、テレビのキャスターとか、コメディアンなどです。彼らは人々を惹きつける話術の名人ですよ。でも、それだけじゃ、ちょっとおかし。ものごとには、基本的な原則とか論理構成がある。場合によっては耳に痛いことも言わなくちゃならない。いろんなプラスとマイナスとを冷静に総合的に判断して、どうすべきかを考えないと。

総合判断は、昔は大学の知識人がやってたことなんです。分野が細分化されている今、そんなことはできなくなりつつある。僕もそれはわかっている。にもかかわらずドンキホーテのように、やるだけやろうってわけです。

情報学と小説

情報学は学際的な広がりをもっているけれど、僕は今、そのベースになる基礎情報学をつくりたいと思っています。情報工学だけじゃなく、分子生物学だとか、動物行動学だとか、いろいろ最新の理系の知がありますね。基礎情報学は、それらにもとづいて、人間とか社会を考えていく学問です。これは、「人間には理性がある」という考えから、あるいはその批判から出発している、近代的な人文社会科学の伝統とは少し違うものなんです。人間をサル的一种、生物の一種としてとらえ直して、そこからメディアとかコミュニケーションについて考えていく。

おそろしく大きな問題なので、僕一人でできるはずはないんです。でも、研究室の活動として、せめてきっかけくらい掴みたい。

個人的に興味のある仕事としては、基礎情報学のほかに小説もあります。学問は、論理で人を説得していくわけだけれど、そこからはみ出していくものもあるでしょ。例えば「サイバースペース」の中で自殺した人の問題をつきつめると、文学の話になっちゃうんだね。一人一人の運命、喜びや悲しみの細部までは、哲学や社会学では追えないんですよ。

小説を書くのは、休みの時です。僕はすごく不器用な人間で、一度に複数のことができないんです。書いている時は、家族に言わせると、普段と全然違うって言いますね。心ここにあらずってことになっちゃうんでしょうね。そのことばかり頭にあってね。

少し偉そうなこと言っちゃったけど、本当はただ自分の夢に忠実に、あともう暫く、生きられたらいいなっていう気持ちだけです。学問でもフィクションでも、人の心を打つものを作りたい。そういう夢がかなえば、いいなあ。



学環の「ありがたいお話」?

.....「学環講話会」

これまで、仮に呼んでいた「学環サロン」が、「学環講話会」という名称に決まった。漢字ばかりで、四角張った感じを受けるが、「講話」には、「説をほぐしてやさしく言う」という意味、また、歴史を遡れば、「ありがたいお話」というニュアンスもありそうだが・・・。眉間に皺よせメモ取る人あり、ビール片手にゆったりと聞く人ありと、参加者の様子はさまざま。月1回開かれるこの会も、早や、5回目を迎えた。

昨年末に開かれた第3回目、原洋之介教授が「『はざま』で考える」をテーマに、自身がラオスなどを歩き周り、自分の目で見えて体験し考えたこと、その国が抱えている問題などを、時折、平勢隆郎教授も巻き込み、エネルギーに語った。会場を学外スペースに変え開催された、

第4回目のテーマは「学環+未来館=***感/歎/観/寒?」。佐倉統助教授と情報学環の客員研究員でもある日本科学未来館の境真理子氏とが、日本科学未来館の現状、問題点、博物館のあり方など、海外の博物館の状況も交え話をした。続く第5回目、「湯けむり事件の真相を聞く」をテーマに、NHKとテレビ朝日系列で放送された「湯けむり事件の謎」という取材シミュレーションゲームの実践と番組について、実際にワークショップを制作した大学院生たちが報告、山内祐平助教授が解説と、活気あふれるものになった。

情報学環客員研究員の紹介

石井 裕 氏

Associate Professor of Media Arts and Sciences MIT Media Laboratory



情報学環・学際情報学環におけるメディアアート及びヒューマンインタフェース関連の研究プロジェクトに参加いただき、年数回の講演、及び学生の研究に関して助言をいただく。

URL <http://web.media.mit.edu/~ishii/>

境 真理子 氏

日本科学未来館メディア設計グループ・シニア科学技術スペシャリスト



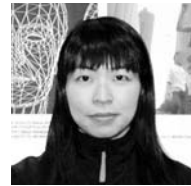
以前はテレビのプロデューサー、今はサイエンスミュージアム、そう話すと随分違う世界に、と言われる。自分

の中でほとんど差はない。送り手と受け手、専門と非専門、どちらも「結び、つなぐ」ためのコミュニケーションの仕事であり表現のメディアである。日本科学未来館と情報学環が、様々な共同プロジェクトを模索し始めたのも、「つなぐ」ための実践と理念で共鳴するからだ。何より、その広く柔らかい「環」の中にミュージアムというメディアも加わり手をつないでいる姿は、素敵だと思う。(境)

森山 朋絵 氏

東京都写真美術館学芸員 /

早稲田大学・同大学院非常勤講師



80年代末から日本初の公立映像文化施設を作ってメディア芸術の企画・収集・ワークショップをやり続けるという苦難の道を突き進ん

でまいりましたが、情報学環の立ち上げ以前から、先生方には本当に励ましとご助力をいただきました。映像メディア教育必修化+日本のメディア芸術大注目の中、今年はArs、ZKM、MITほか海外にも飛び出つつ、少しでもご恩返しできれば幸いです。(森山)

TOPICS

メルプロジェクトの現在

異分野を結ぶメディアと学びの回路作りを目指して

東京大学情報学環助教授 水越 伸



メルプロジェクトとはなにか

メルプロジェクト (Media Expression, Learning and Literacy Project) は、メディアに媒介された「表現」と「学び」、そしてメディアリテラシーについての実践的な研究を目的とした、ゆるやかなネットワーク型の研究プロジェクトです。

デジタル化とグローバル化が同時進行し、混沌とした様相を呈しつつある情報社会の中で、人々がいかにしてメディアリテラシーを身につけていくか。メディアに媒介された表現や学びをどのようにして展開していくか。多様性のあるメディアの生態系をいかにして自律的にデザインしていくか。このような課題に取り組むために、共同研究プロジェクトとして立ち上がりました。2001年1月に正式に発足し、5年間限定で活動しています。

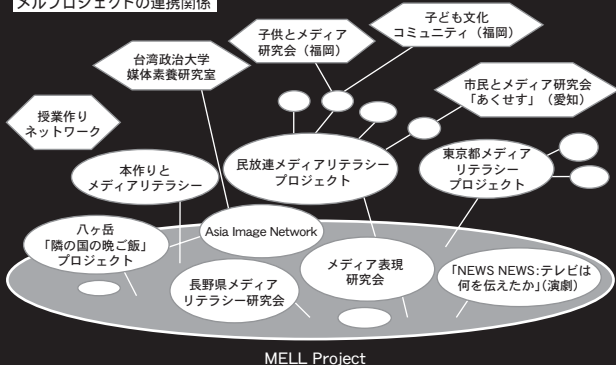


「同時多発」するサブプロジェクト群

メルプロジェクトでは、いくつかの「サブプロジェクト」と、それらよりはやや関係のゆるい「関連プロジェクト」を同時多発的に展開しています。おもなものをあげておきましょう。

まず、民放連メディアリテラシー・プロジェクト。民放テレビ局と地域の子どもたちを結びつけ、子どもたちがテレビ番組作りをすすめる。送り手と受け手が地域の中で、メディアリテラシー、メディア表現を学び合っていくという活動で、宮城、長野、愛知、福岡の4地域でパイロット研究を展開し、広くその成果を公開していきます。次に、東京都プロジェクト。学校ではなく公民館やミュージアムを使って行うことができるメディアリテラシーのプログラム作りを進めました。

メルプロジェクトの連携関係



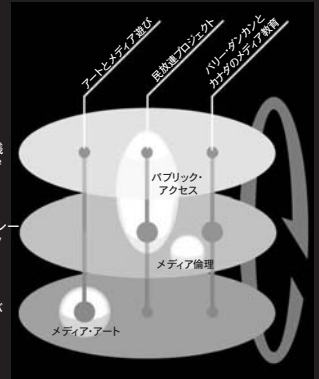
MELL Project

メディア遊び、リテラシー、実践の関係

注: 水越 伸(2001)『メルプロジェクト・シンポジウム資料集』(2002年)から

このほか、本作りとメディアリテラシー・プロジェクト、アジアのメディアをめぐる実践研究「あい

ーん(Asia Image Network)」、演劇「NEWS NEWS: テレビは何を伝えたか」の上演、メディア表現という新しい領域についての「メディア表現」研究会など、幅広い活動を展開しています。



メルプロジェクトのしくみ

メルプロジェクトのメンバーは、関わり方の度合いによって三つの位相に分けてとらえることができます。まず山内祐平助教授、私(水越)をはじめプロジェクト全体の差配をするプロジェクト・リーダー(6名)。次にプロジェクトに参加し、研究を進めるメンバー(約90名)。これは大学院情報学環のスタッフや大学院生を中心に、学校教諭、マスメディア関係者、ジャーナリスト、社会教育関係者、情報デザイナー、市民活動家などから構成されています。そしてメーリングリストなどでの情報提供を受けているサポーターが、2003年初頭現在約250名います。

これらの人々のコミュニティはウェブサイトや、月一回配信のメールマガジン「メル」などで、情報を共有し、議論をしています。また月に1回の作業ミーティングと公開研究会、年1回のシンポジウムなどを開催しています。

このほか大学院情報学環で山内助教授と私が担当する「情報リテラシー論」、「メディア表現論」は、共同研究プロジェクトであるメルプロジェクトとは別系統の教育活動ですが、メルプロジェクトの実践と深く結びついています。



Playful & Hard Funでいこう!

メルプロジェクトは、「プレイフル(playful)」で、「ハードファン(hard fun)」にいきたいと考えています。メディア論、学習理論、カルチュラルスタディーズなどを広く社会のリアリティの中でとらえ、メディアに対する批判精神や硬派な社会意識をしっかりともちつつも、深刻ぶらず、挑発的に、愉快に取り組んでいきたい。そして映像を鑑賞することの楽しさや、コンピュータを使いこなすことのおもしろさが、メディアと人間の関わりの基本にあることを忘れずにいきたいと思っています。今後は、実践と理論・思想の往復運動をしっかりと進めながら、東アジア諸国の人々と連携し、活動を深めていきたいと思っています。

PROJECT

Media Expression, Learning and Literacy Project

問い合わせ先 URL <http://mell.jp>
水越伸助教授 e-mail : shin@iii.u-tokyo.ac.jp
山内祐平助教授 e-mail : yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

バイオン・三次元デジタルモデル化
プロジェクト始動(池内克史教授)



池内研究室では、カンボジアのアンコールトム・バイオン寺院全体の三次元デジタルモデル化プロジェクトのため、現地の日本国アンコール修復隊(JSA)の協力の元、2月中旬から約3週間かけて計測を実施。今回のプロジェクトでは、基本的に足場等は用いず、地面、テラス、経蔵、散乱石の上から30以上ある塔全体、レリーフ、四面体の観世音菩薩像を計測。また、気球を用いた新開発のフライングセンサを用いての計測も行った。これによりクレーンでは届かない高い建物などの計測も可能となり、今後、様々な計測での応用も期待される。



研究支援用

ソフトウェアの無償頒布を開始
(歴史情報論研究室 馬場章助教授)

歴史情報論研究室では、イメージファイルを用いる研究を支援するツールとしてiPalletnexusを開発し、試用版の無償頒布を開始した。iPalletnexusは、イメージの拡大・縮小・移動・回転などの基本機能のほか、テキストの書き込みの機能や複数のイメージの比較機能を備えている。イメージファイルの許容量はコンピュータのスペックに依存する

GAKKANN CARTEL

NEWS

2003 NUMBER. ONE

「学環・学府」は、情報学環の日々の活動を、より多くの方に知っていただくものです。企画室では、研究室の活動報告、イベント予定など、あらゆる情報をお待ちしています!

作された。ヴェイパールというフワフワした紙に白い箔押しがされ、手にとってみると「何だろう?」となてなくなるようなもの。実際シ



が、原理的には無限大である。拡張性・汎用性も高い。現在はWINDOWS2000/XPに対応する。
問い合わせ先 イパレットネクスス開発グループ
e-mail:nexus-desk@ipallet.org
URL <http://www.ipallet.org/nexus/>

メルプロジェクトからのお知らせ
公開研究会開催中

月一度程度、関心のある方々に公開する研究会を開催中。基本的にはメルプロジェクトの研究活動を報告し、ディスカッションをするもの。4月には、2002年冬学期の授業「メディア表現論」の成果を大学院生たちが発表、議論する予定。
公開研究会「メディア表現論発表会」
4月5日(土)午後3:00~5:00過ぎ
情報学環暫定建物二階会議室(予定)
メルプロジェクト・シンポジウム終了

3月7日から9日までの3日間、東京大学本郷キャンパス法文二号館にて、シンポジウム「メディア表現、学びとリテラシー2003:メルプロジェクトの衍生(えんせい)」が開催された。学環スタッフ、学院院生を中心とする約30名の事務局体制のもと、今年は台湾政治大学の呉翠珍副教授の講演から子どもたちのための粘土アニメワークショップまで多様なプ

ログラムが展開され、好評のうちに終了。参加者数はのべ330名。

「東京都プロジェクト」

メルプロジェクトでは、社会教育領域におけるメディアリテラシー育成のためのプログラム作りを進めており、その一部は東京都生活文化局の要請を受けて年度末に報告書(CD-ROM付)としてとりまとめる予定。また、武蔵野・三鷹地域における公民館などの施設を活用したプログラムと、東京都写真美術館における博物館を活用したプログラムを並行して進め、村田麻里子氏(水越研究室博士1年)・安美羅氏(水越研究室修士2年)などがディレクターを務めた。
問い合わせ先 水越伸助教授
e-mail:shin@iii.u-tokyo.ac.jp
山内祐平助教授
e-mail:yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp
URL <http://mell.jp/>

情報学環創設記念シンポジウムに
配布したリーフレットが、

New York Art Director's Club

2002 Merit Awardを受賞

2000年11月27日に開催された、情報学環・学際情報学府創設記念シンポジウムで配られたこのリーフレットは、赤木洋氏(水越研究室修士2年)が、デザイナー寒河江巨太氏(Chou Design Co., Ltd.)に依頼し制

ンポジウム会場に来た人たちも、手でこすったり、顔でなでたりしていたらしい。このリーフレットと蛍光ピンクのポスターを選んだ、担当の水越伸助教授、佐倉統助教授に、赤木氏は内心「大丈夫?」と思ったとか。海外で賞をとったこの作品、現在、学環長室の棚に大切に保管されている。

中村直行氏(須藤研究室博士1年)
がん研究助成金継続

中村氏が所属する厚生労働省がん研究助成金「我が国におけるがんの代替療法に関する研究」班が2年継続延長決定。中村氏は、この班に昨年1月から参画。昨年12月の中間報告により、さらに2年間の研究継続が、厚生労働省から承認された。中村氏の担当分野は、「インターネット上における補完代替療法情報の問題点と改善案(修士論文テーマ)」。3月20日の京都府立医大における班会議から研究を再開する。

学際情報学府学生から助教授に

この4月から、大黒岳彦氏(西垣研究室博士1年)が、明治大学情報コミュニケーション学部助教授に、水島久光氏(西垣研究室修士2年)が、東海大学文学部広報メディア学科助教授になることが決まった。

BOOKS

平勢隆郎教授著『春秋』と『左伝』



これまで天下の史書だと思われていた『春秋』『公羊伝』と『左伝』を具体的記事に即して読み比べ、戦国時代の天下の中いくつかあった領域国家の主張をあぶり出すと、孔子に対する評価が領域国家ごとに異り、本文と漢以後の注釈も主張が違うことがわかった。平勢教授がこれまで進めてきた膨大な年代矛盾の解消作業を基礎とする検討。
『春秋』と『左伝』平勢隆郎 著 中央公論新社

佐倉統助教授著の『進化論の挑戦』が文庫に



1997年に出版された佐倉統助教授著「進化論の挑戦」が角川ソフィア文庫から再刊。進化生物学と周辺諸分野の関係を総覧し、優生学や進化倫理学、フェミニズム、認識論、進化心理学などについて紹介しつつ、佐倉助教授の考察を加え、文庫化にあたり誤りを修正、新しい情報が追加された。
『進化論の挑戦』佐倉統 著 角川ソフィア文庫

苗村健助教授の本



本書は、写実的な画像の高描画手法として高い評価を集めているフォトンマッピングについて書き記した
“Realistic Image Synthesis Using Photon Mapping”の日本語翻訳版。日本ではこの分野の解説書がまだ数少ないため、この日本語版では、初学者を対象とした補足説明を大幅に書き足してある。
「フォトンマッピング - 実写に迫るコンピュータグラフィックス」Henrik Wann Jensen 著 / 苗村健 訳 オーム社

水越伸助教授が携わった
「変革の世紀」フォーラムの本



2002年12月に終了した共同研究プロジェクト、「変革の世紀」フォーラムの成果が、本として刊行、全二巻。
『NHKスペシャル』変革

の世紀』水越伸・NHK「変革の世紀」プロジェクト 編 日本放送出版協会

羽山博氏(植田研究室博士1年)の本刊行



UNIXが、全く初心者のための解説書。ログインの仕方から、ファイル管理、印刷、メール、ジョブコントロールまで、実際の操作場面に沿ってわかりやすく説明。98年刊行のものに次

ぐ原著第5版の翻訳版。
「入門UNIXオペレーティングシステム」J.Peek 他 著 / 羽山博 訳 オライリー・ジャパン



sed,awk,perlによるテキスト処理、GIMPによるグラフィック加工、XMMSやXINEによるマルチメディア処理まで、Linux/UNIXのデータ処理を解説。
「アスキー・ラーニングシステム 実用UNIXデータ処理編」羽山博 著 アスキー出版局



編集/発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 企画室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>